

第42回 日本基督教団総会

2022年9月27日(火)~29日(木)



速報

42 Kyodan Soukai Sokuho

No.2
2022.9.28
19:00

† 総会速報発行委員会 発行



新書記選出 黒田若雄

午後のセッションで、議長・副議長から、議場へ黒田若雄議員を

書記とするとの推薦があ

り、議場はそれを承認した。

黒田新書記は「器でないと思うが精いっぱい努めたい。30数年四国の教会に仕え、他の教区を知らぬ者であるが、



一日目最終セッションで行われた副議長選挙は、開票作業が翌日午後越しどり、二日目には選挙結果が確定したが、一回目の投票では過半数を獲得した当選者がなく、二回目の投票で、新副議長に藤盛勇紀議員が当選した。

藤盛新副議長は挨拶で「当惑をしている。主の御心と信じ、お受けしたい。雲然議長は経験がないとおっしゃったが、12年間の三役のお働きがあり、十分な経験をお持ちである。議長と同じ方向でしっかりと議長を支え、教団にお仕えしたい」と述べた。

雲然議長は、久世そらち副議長に対し「4年間、特にコロナ禍の中、多様な方向性を示していただき、本当に感謝であり、札幌北部教会にも同様の感謝を表したい」と述べた。

久世副議長は、「4年前、タルシシユ行の船に乗りたいと言つたが、働きの

セッションで、別意見の代表としての立場を痛感した。加えて、教団を支える貴い事務局の働きを知ることができた。これからも北海道の地で教団を覚えてい」と挨拶した。前副議長のため小林真議員、新副議長のために松木田博議員が祈りを捧げた。

新副議長選出

藤盛 勇紀

中で多くの出会いがあり、多くのことを学ぶことができた。異なる意見の人たちの中で、別意見の代表としての立場を痛感した。加えて、教団を支える貴い事務局の働きを知ることができた。これからも北海道の地で教団を覚えてい」と挨拶した。前副議長のため小林真議員、新副議長のために松木田博議員が祈りを捧げた。

機構改定検討に関する報告会

午後のセッションで、議長・副議長から、議場へ黒田若雄議員を書記とするとの推薦があり、議場はそれを承認した。黒田新書記は「器でないと思うが精いっぱい努めたい。30数年四国の教会に仕え、他の教区を知らぬ者であるが、

【第1回目 本投票の結果】

投票総数	337票
有効投票	336票
無効投票	1票
藤盛勇紀	168票
久世そらち	148票
黒田若雄	6票

(以下省略)

【第2回目 本投票の結果】

投票総数	340票
有効投票	340票
無効投票	0票
藤盛勇紀	182票
久世そらち	150票



総会2日目の午後のセッションで、機構改定検討に関する報告会が行われた。この報告会は本総会において機構改定に関する教規変更案の提出に至らなかつたため、常議員会との約束に従つてその経緯を報告することを趣旨とするものである。

雲然俊美議長は「第40回教団総会で教団の将来的な教勢・財政の危機的状況を共有することから機構改定の検討が始まり委員会を組織。多くの意見を聞きながら議論を重ねてきた。しかし沖縄教区不在での検討や伝道と財政の問題を一体とする議論への異論は根強く、加えてコロナ禍のために各教区総会で十分に協議することもできなかつた。一方でコロナ禍における会議のオンライン化によって財政危機は一時的に足踏み状態となつてゐる。これらのことから常議員会の了承のもと教規変更案を取り下げるに至つた」と説明した。

その後、機構改定に関する意見交換の時間をもつた。出された主な意見や

総会2日目の午後のセッションで、機構改定検討に関する報告会が行われた。この報告会は本総会において機構改定に関する教規変更案の提出に至らなかつたため、常議員会との約束に従つてその経緯を報告することを趣旨とするものである。

◎教規変更案の第46条2から小委員会の名称が削除されているが韓国協約委員会、台湾協約委員会、イスラム教協約委員会は協約相手あつてのもの。名前を記すことを世界宣教委員会として要望する。

◎各委員会のメンバー構成についてジエンダーパー平等のことを明記すべきである。

◎教区の機構改定も求めるのか。

◎中央集権的から地方分権的になる改定を願う。「伝道する教団」というが実際に伝道するのは各個教会。教団は教区のあり方を尊重し、各個教会の伝道力を支えてほしい。

◎「伝道局・教務局」という名称から戦時中のトップダウンを連想する。再考を求める。

◎「伝道局」の名称について。漢字文化圏では伝道よりも「宣教」が望ましい。

◎教団機構改定検討に関する主な論点に「速やかに行う」と「慎重に行う」等、対立する事柄が並記されている。機構改定を進めるなら常議員会としてどちらにシフトするか決めるべき。

逝去者記念礼拝

「祝福された命」

小林よう子牧師(八戸小中野教会)による追悼説教

ヨハネの手紙一 4章7～21節

今年の7月2日、外出している間に通信障害があり、携帯で電話を受けることが出来なかった。翌日の日曜日、隣町に住む教会員の娘さんから、昨日、母が亡くなつたとの知らせが届いた。亡くなつた方は、東日本大震災で自宅が流され、新しい家に移る中で認知症が進み、教会には来られなくなつていた。年に数回、訪問聖餐を行つていたが、感染症が広がつてからは訪問出来なくなり、骨折して入院した後、施設に入所。家族も面会できない中、90歳で亡くなつた。

この方は中学校を卒業すると同時に働き始め、和裁の先生に誘われて教会に通うようになり、22歳で洗礼を受けた。教会の幼稚園で働いた後、27歳で結婚。結婚生活は過酷なものだった。最初は夫の家族と同居で、彼らの事情により生活は翻弄された。夫は威圧的で、些細な冗談も言えない空気があった。子供たちも息をひそめて生活していた。

娘さんに、子どもの頃の思い出話を聞くと、母親は家にいなかつたといふ。子供たちは家を出た後、彼女は50歳を過ぎて離婚。70歳で仕事を引退し、娘家族と同居した。娘さんはその時、母が教会に通つていたことを知つた。母が家にいなかつたのは、仕事で忙しかつただけでなく、教会で過ごしていきたからだと分かつた。家庭生活が悲惨であった頃、牧師夫妻や同年代の女性たちと親しくなり、婦人会で活躍していた。家庭の中で辛く悲しいことがあっても、彼女も受け継がれて行くことを祈りたい。

が生きるのを投げ出さなかつたのは、自分が神に愛されていることを信じることができたからだと私は思った。

彼女の愛唱聖句が本日の箇所だった。この箇所を娘さんに聞いてもらつた時、私は何も説明はいらんないと思った。人生の辛い時に彼女を支えたものが何であつたかがここに記されている。やがて娘さんは、子供の頃、母親に連れられて教会に行き、かくれんばをして遊んだこと、教会の人に寛いがつてもらつたことなどを思い出した。

彼女は、自分らしく生活できるようになつてから楽しい時間を過ごし、孫たちとの生活を楽しんだ。孫たちには、いたずらが本当の彼女の姿だったのだと思う。けれども自分らしく生きることが出来ない時代があつた。そのような中でも、自分が愛されれていると信じられる場所と時間があり、彼女は生き延びることが出来た。90年の彼女の人生は祝福された命であつた。

信仰を持つて生きることは、自分に与えられた命が祝福された命であることを知つてゐることを教えてくれている。この4年間、教会は多くの方々を神の御許に送つて来た。今から教師として召された人々の名を呼ぶ。その名の背後に多くの信徒の人生があることを覚えたい。彼らの人生を支え、神の愛を伝えて来た教会の働きがこれから



娘さんに、子どもの頃の思い出話を聞くと、母親は家にいなかつたといふ。子供たちは家を出た後、彼女は50歳を過ぎて離婚。70歳で仕事を引退し、娘家族と同居した。娘さんはその時、母が教会に通つていたことを知つた。母が家にいなかつたのは、仕事で忙しかつただけでなく、教会で過ごしていきたからだと分かつた。家庭生活が悲惨であった頃、牧師夫妻や同年代の女性たちと親しくなり、婦人会で活躍していた。家庭の中で辛く悲しいことがあっても、彼女も受け継がれて行くことを祈りたい。

総会速報について

「総会速報」を発行いたします。この速報はインターネットでもご覧になれます。

URL <http://uccj.org>

